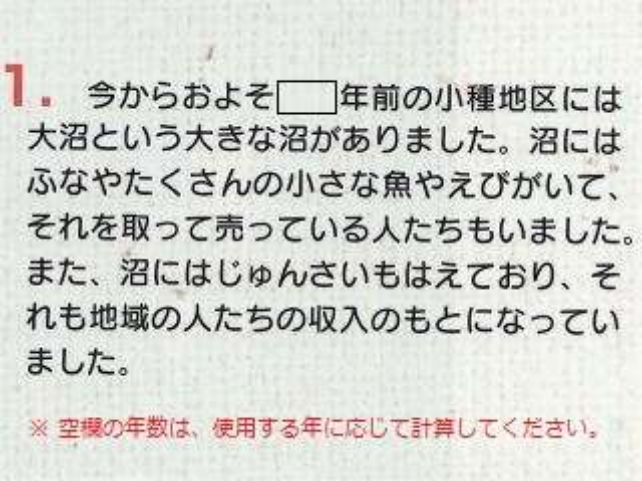
紙芝居「大沼の干拓」

制作：協和町立小種小学校

昭和６１年８月

ふるさと学習のページへ　　TOPページへ



1.　今からおよそ□年前の小種地区には大沼という大きな沼がありました。沼にはふなやたくさんの小さな魚やえびがいて、それを取って売っている人たちもいました。また、沼にはじゅんさいもはえており、それも地域の人たちの収入のもとになっていました。

※ 空欄の年数は、使用する年に応じて計算してください。

2. この大沼のまわりから大川端にかけては、一面の湿地帯でいつもじめじめしていて雑草やいろいろな種類の木がおいしげっており、荒れ地で手のつけられない所でした。荒れるにまかせた沼のあたりには、野鳥や小さな動物がたくさん住んでいて夜になると動物のなき声の聞こえるさびしい所でした。

3. 大沼の近くの田んぼは、雨が降り続くと大沼の水があふれて水びたしになることがたびたびでした。そして田植えの時期には水不足になって、沼から足ふみの水車を使って水をくみ上げたり、小さな谷川から流れてくる水を田に入れるため、夜も寝ないで水の番をしなければなりませんでした。また、田植えの後、水不足になり田んぼの地面が白くなり、地われすることもありました。

4. しかも大沼のまわりの田んぼは、春、田んぼをたがやす時期になっても、土がやわらかく、馬を入れて、馬こうをかけることもできず、すべての仕事を人手でやらなければなりませんでした。ずぶずぶぬかる田んぼで三本くわをふり上げて一歩一歩たがやしていく様子があちこちで見られました。それは、大変なんぎな仕事で今のわたしたちにはとても想像できないほどでした。

5. 今から［　　］年前の大正十三・四年の小種地区はひどい水不足におそわれ農作物がほとんど取れない大かんばつに見まわれました。沼の近くでありながら水不足で米は全く取れず、地域の農民の生活はとても苦しい状態でした。村の人々はお米が取れる田んぼや新しい田んぼをほしいと願うようになりました。

※ 空欄の年数は使用する年に応じて計算してください

6. 当時、淀川村の村会議員であった加藤金司は凶作になやんでいる村の人々の姿を見て、なんとかしなければと思いました。三十九才の金司は、この広い大沼を田んぼにしようと干拓を考えました。金司は、強首の県会議員小山田義考さんや志を同じにする人々を集めて仕事のしやすい田んぼ、お米のたくさん取れる田んぼにするため耕地整理組合いをつくることにしました。そして、金司は大正十三年に淀川村の村長になりました。

7. 大沼の干拓計画をふくんだ耕地組合つくりには、地主をはじめ沼の魚取りをしていた人々や農民の反対がありました。
「これからは、乾田にして馬耕でたがやさなければ、いい米はできないぞ」農民の反対にたいしては、金司は一人一人説得してまわりました。

8. 地域のひとびとを説得した金司は、秋田市からの技術者をたのんで測量してもらいました。調査の結果、中小種の方へ水を流すのが一番よいということで排水路をつくる計画をたてました。大正十四年、この計画にしたがっていよいよ工事が始められました。そこで働く人たちは一日百人以上だったということです。

9. 工事にとりかかってまる一年、大沼の水は、新しくできた排水路から、いきおいよくはき出されました。それを見ていた村人は、新しく広い田んぼがまもなく現れることに大喜びして見ていました。

10. こうして大沼の干拓地に60ヘクタールと大沼のまわりの湿地帯に、80ヘクタールの新しい田んぼが出現しました。村人は新しい広い田んぼに希望をのせて米づくりに取りかかりました。

11. しかし、水のひけた沼とそのまわりにできた田んぼは、ヘドロ状態で、腰までぬかる田んぼでした。田植えをするときは、田げたをはいて作業をしたり、田げたを使えない所では、板に片ひざをついてしずまないようにし、もう一方の足でこいで、移動して田植えをしなければなりませんでした。秋になっても、田んぼは乾かないので、どろ水の中で稲かりをしていました。

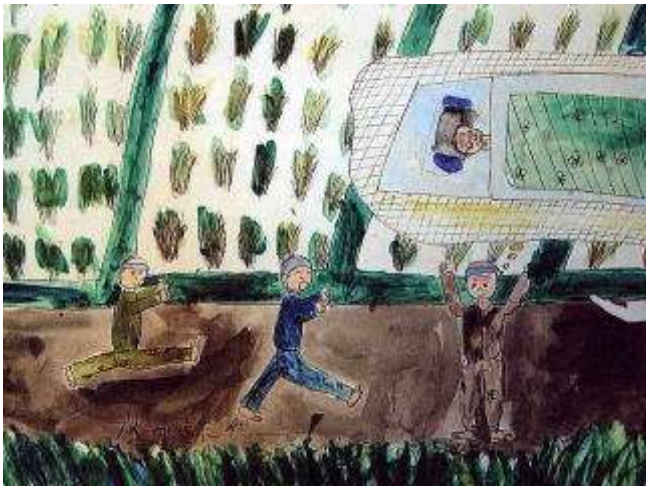
12. 田んぼがどろ田だったため稲のできも悪く取れ高もとても少ないものでした。「広い田んぼができたども田んぼは相変わらずぬかるし水のかかりもそれほどよくないし、米こもよけい取れないし困ったもんだ」「おらえの本家では、耕地整理組合さ納めるお金だの刈和野の土肥商店から借りている肥料代など早くもどさなければ田んぼ取り上げるよと言われているそうだ」などなど苦しい生活の農家が多かったそうです。

13. 村長の加藤金司はぬかるみの広い田んぼに人手がなく苦しんでいる村人を見てまわりの村から入植者を募集することにしました。新しくできた田んぼを入植者に売って収入をあげることにしたのです。最初の入植者は今の雄和町、西仙北町、中淀川から13戸だったそうです。しかし、入植者のなかには二、三年であきらめて村を出ていく人もいました。夜こっそり抜け出して、どこかへ消える家族もあったそうです。

14. 一方、農家の人々は、冬になると、田んぼの土を改良して稲の育ちをよくするために客土を始めました。
自分の家の小高い所や、川岸につもった土を、田んぼに入れる作業でした。
農家の人たちは雪の上を「そり」を引いたり「馬そり」を使って土運びにがんばりました。

15. このように農家の人達が努力しても稲のできは、なかなかよくなりませんでした。金司は県庁に何回となく出かけて行って、田んぼのぬかるみをなくす、あんきょ排水工事を県の事業としてやることを願い出ました。そして、ついに願いを聞きいれてもらいました。田んぼに１メートルの深さのみぞをほって、土管をうめ、それに田んぼの水を集めて流すしくみです。これが完成すると米の取れ高が多くなるということでしたが農家の人々はまたまた借金がふえるのではないかと反対する声もありました。

16. さらに田んぼの水不足をなくすために泉沢のつつみの堤ぼうのかさ上げをしました。
これまでの土手にさらに２メートル近くの土を盛り上げて多くの水をたくわえるための工事をしました。



17. 「おーい、水がきたぞー。わー水だ、水だ」「どれどれ、あ、水だ、水だ」
昭和二十三年小種地区の土地改良工事はほぼ出来上がりました。農業会では、淀川村から電気を引いてもらい、大川端に雄物川から水をあげる大型の揚水機の取り付けを完成しました。
田んぼも乾田になり、水不足の心配もなくなり村の人々はおどり上がって涙を流して喜びました。

18. 「この水、加藤のおどさんに見せてやりたいな。」
「加藤のおどさんは、自分の財産をみんなはたいてまでも干拓にがんばったのに。」
昭和十九年まで村長をつとめ村のためにつくした加藤金司はこの様子を病床で聞き、大川端の揚水場が完成した翌年の正月、自宅で静かに息をひきとりました。六十三才でした。

19. その後、昭和三十三年から、淀川農協が第二次あんきょ排水工事事業を始め、三年後の三十六年に完成しました。
その結果、これまでの湿田がみごとな美田に生まれかわり、広い田んぼには耕耘機の音がひびき、秋には黄金の稲穂がゆれるようになりました。

20. これまでは、10アールあたり240キログラムくらいしかとれなかった米が、二倍の480キログラムの米が取れるようになりました。
今の小種地区のみごとな広い田んぼは、加藤金司をはじめ、たくさんの人々の努力によるものです。